



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内蒙古語チャハル方言におけるI音について
Author(s)	一ノ瀬, 恵
Citation	北海道大學文學部紀要, 40(2), 169-188
Issue Date	1992-02-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33586
Type	departmental bulletin paper
File Information	40(2)_PL169-188.pdf



内蒙古語チャハル方言におけるI音について

一ノ瀬 恵

1. はじめに
 2. Iのさまざまな現れとその解釈
 3. *iの折れによって生じたI
 - 3.1 語頭Iの前のj
 - 3.2 オルドス、ハルハ方言との対応関係
 4. まとめ
- 注
- 参考文献

1. はじめに

モンゴル諸語は母音調和をもつ言語として知られているが、本稿で扱おうとしている「内蒙古語」(栗林 1989: 1427)の口語標準語の基礎となったチャハル(Chakhar)方言もその例外ではない。わが国で初めてチャハル方言の音声、音韻について考察した服部(1951)は、この方言の第1音節の短母音に男性母音 /a, o, u/ [a, ɔ, o], 女性母音 /ä, ö, ü/ [ɜ, θ, u], さらに一語のなかで、このいずれとも共起しえる中性母音 /i/ [ɨ] の7つをたてている¹⁾。

一方、このうち前舌母音について、中国では清格爾泰(1957-8)がチャハル方言に男性母音の i, すなわち I の存在を認めて以来、女性母音 i に対立する男性母音 I が独立の音素として存在することが認められ(ir「来い」: Ir「開け」, xir「汚れ」: xIr「尾根」), 現在、服部のような中性母音という考え方はなされていない(清格爾泰 1963: 13)²⁾。

しかし、このようにIは音素として認められてはいるものの、それがいかにして生じたものかという歴史的な問題については、これまで研究者の間で、必ずしも意見の一致をみておらず、また、十分に論じられてきてもないように思われる。

本稿で筆者は、一部の研究者（例えば諾爾金^{ノールジン} 1981: 21-22）のように、iが蒙古文語の段階で、すでにiに対立するものとして存在していたとする立場はとらず、第1音節のiの第2音節の男性母音による、伝統的に「*iの折れ」とよばれる同化、第1音節の男性母音の第2音節のiによるウムラウト化、さらに、語頭の硬口蓋子音による第1音節の男性母音の口蓋化という、これら3つの同化作用によって生じた音が合流することによって、次第にその機能負担量を大きくしていったとの推論に立ち、このうち、特に*iの折れについて、第2音節に母音aをもつ語を中心に論じてみたい。

なお、以下では、蒙古文語のiが共通蒙古語を反映しているとの仮定の上で議論を進めていく。これは蒙古文語が共通蒙古語の状態を非常によく保存しており、実際、この仮定に立ち、これまでもモンゴル語諸方言と蒙古文語の比較対照を通じて、その歴史的変化の諸相が説明されてきたという事実による。しかしながら、現在のモンゴル語諸方言が蒙古文語に直接さかのぼることが明らかではない以上、このような方法自体、根本的な問題をはらんでいることも否めない。また、蒙古文語にのちの時代の口語から、類推によって新たな正書法の綴りが混入された可能性もある。

ただし、今回、筆者が扱う*iの折れの問題に関しては、すでに栗林が同様の仮定に立った一連の研究によって、大きな成果をあげており、本稿の蒙古文語の例も栗林(1982a)に即したものである。服部(1983a)も栗林のこの方法について警告を発しているものの、*iの折れという現象が存在すること自体、異論がないことは明らかである。したがって、本稿ではこれらいくつかの問題点を踏まえながら、従来の方法で考察を進めていくことにする。もちろん、諸方言の実状を詳しく調査し、それによって祖語形の再構を試みていくことも筆者の今後の課題である。

考察にあたっては、シリングル盟フブート・シャル旗出身のチャハル方言話者³⁾に対する調査によって得られた資料をもとにし、補助資料として武達(1982)、孫竹(1985)⁴⁾などを用いる。

2. Iのさまざまな現れとその解釈

武達 (1982) によれば, Iはさまざまな現れを見せている。ここでは, 武達のあげている例のうち, 第1音節に短母音Iをもつ語にかぎってあげ整理してみる。すると, Iは蒙古文語の次のような音に対応して現われている。以下, 例は左には蒙古文語形, 右にはチャハル方言形 (それぞれ, Mo., Cha. と省略) をあげる。なお, 武達はこの音をIではなく, iで表記しているが, 服部 (1984) により, 同じ音価を表わすものとみなし, Iに置き換える。

1) 第2音節にaをもつ第1音節のi

Mo.	Cha.	
bildauči	bildu:tʃ	「おべっか使い」
činar	tʃɪnar	「性質」
iraqu	ɪrax	「開く」
jiysaɣal	dʒɪgsa:l	「行列」
jiɣaqu	dʒɪɣax	「楽しむ」
kiɣaɣar	xɪdʒa:r	「境界」
kir·a ⁵⁾	xɪr	「尾根」
nimbai	nimbæ:	「細心な」
niča	nɪtʃ	「粉々に」

2) 第2音節以下にiをもち, 語頭のj, č, y, q, tに後続する第1音節のa

Mo.	Cha.	
čakilɣan	dʒɪxalga:n	「電気」
čalir	tʃɪral	「鶴嘴」
jaɣi	dʒɪdʒ	「もみあげ」
jaɣiy·a	dʒɪxa:	「手紙」
jaɣlir	dʒɪrlag (~dʒærlag)	「命令」
jaɣliqu	dʒɪlgax (~dʒælgax)	「吞込む」
yariy·a	jɪra: (~jæra:)	「話」
qatagi	gɪtag (~gætag)	「腫れ物」

qalturiqu	giltrax (~gæltrax)	「滑る」
taqiy·a	dixa:	「鶏」

3) 語頭に č, j, y, š をもつ第1音節の a

Mo.	Cha.	
čačau	dʒɪtʃu:	「同じ歳の」
čačaqu	dʒɪtʃax	「振りまく」
čay	tʃɪg (~tʃæg)	「時間」
yay	jɪg (~jæg)	「ちょうど」
yayan	jɪga:ŋ	「ピンク色の」
jayaγ·a	dʒɪja:	「運命」
šalja	ʃɪldʒ	「だに」

まず、1) は蒙古文語の第2音節の a に先行する i の位置に、i が現われていることから、*i の折れが考えられる。2) では、第1音節の a が第2音節以降の i によってウムラウト化したことが考えられる。ただし、j, č, š, y, q, t といった子音以外にもウムラウト化は起こるが、その際には、a は i まで移行せず æ でとどまっている (Mo. bari.=Cha. bæɾ-「つかむ」)。さらに、3) は、1) や 2) のような母音の影響によるものではなく、語頭の硬口蓋子音による第1音節の a の口蓋化によるものと考えられる。

このように、武達のあげた例からみるかぎり、i の現れには、*i の折れ、ウムラウト化、硬口蓋子音による母音 a の口蓋化という、3つの同化作用が関与しているということができそうである。ただし、2), 3) については、上例のとおり、武達がいくつかの語において、i~æ の揺れを指摘していることは無視できない。筆者自身の調査でも、3) の čay は [tʃey], yay は [jey], yayan は [jeyɑ:ŋ] であった。したがって、2), 3) については、チャハル方言内部での地域的な差があるのか、あるいはもっとちがった音声条件を設定する必要があるのか、さらなる検討の余地を残している。ここではまず、1) の場合にかぎって、考察を進めていく。

ところで、上述のとおり、従来の研究者は i を独立の音素として認めてはいるものの、それがどのようにして生じたものかという問題については、個

々に見解が一致していない。

例えば、武達 (1982)、孫竹 (1985) らは、いずれもこの点についてなんの説明も加えていない。清格爾泰 (1957) は、上述の 1) の I については、これが *i の折れの一段階を示す音であるとしているが、それに関する詳しい考察はおこなっていない。また、2) や 3) についてはなにも触れていない。さらに、^{バインチヨクト}白音朝克図 (1981) によれば、「I は語頭母音と非語頭母音 (特に第 2 音節の男性母音) とが相互に影響しあう過程のなかから、i の異音として生じたものが、母音調和が整備されていくに従い、次第に音素としての資格をえていったものである」とある。しかし、「相互に影響しあう過程」というのが、具体的にどのような過程を示すのかについては、なにも述べておらず、上述のいずれの変化について言及しているのか、必ずしも明らかではない。しかし、いずれにせよ、清格爾泰と白音朝克図は、I がなんらかの音声変化によって、あらたにチャハル方言の母音体系に加えられたものであると考えている点では一致している。

一方、諾爾金 (1981) は、*i に関して、男性母音と女性母音の区別は、すでに蒙古文語にもあったとしている。^{ボルチヨロー}保朝魯 (1985) も、I の由来について直接に言及しているわけではないが、(Mo.) birɤu=(Cha.) biru: 「2 才の仔牛」、(Mo.) kirɤu=(Cha.) xiru: 「霜」などの例をあげて、これらの I が *i の折れではないとしていることから、I が *i からなんらかの音声変化を経て生じたものではなく、*i に対立するものとして、すでに祖語の段階に存在していたと考えていることがうかがわれる。

このように、チャハル方言における I に関して、上例の 1) については *i の折れによるとするもの、1), 2) のいずれとは明示されてはいないが、なんらかの語頭母音と非語頭母音の相互影響によるとするもの、さらに祖語に存在していたとするものと、大きく 3 つの考え方がこれまであったと思われる。しかし、いずれにせよ、それぞれの根拠を明確にし、この問題を正面から扱った研究は、少なくとも筆者の知るかぎりでは、ないと言わざるをえない。

ここで I に関する上の 3 つの考え方を検討してみよう。

まず、*i*が語頭母音と非語頭母音の相互影響によるとする白音朝克図の見解にみられる不鮮明さは、*i*がかかわっている **i*の折れとウムラウト化という2つの同化現象を正しく分類しえていないことに原因していると思われる。

一方、*i*を蒙古文語にも存在していたとする諾爾金や保朝魯の考え方は、ウラディーミルツォフ (Vladimircov 1929) に始まる、12-3世紀の蒙古語に前寄りの *i* と後寄りの *i* があったとする推定を受けついだものである。しかし、ウラディーミルツォフはその根拠として、いくつかの語を例にあげ、蒙古文語の *i* がチュルク諸語の *i* と対応していることを指摘しているだけで、モンゴル語内部での証拠が見いだせていない点、にわかに首肯しがたい。

ところで、諾爾金のいうように、蒙古文語にすでに *i* と *I* の区別があったとしたならば、第2音節以降にも *I* はなんらかの形で現れることが予想される。ところが、諾爾金は第2音節以降には *I* は現れないとしており、その原因についてはなんの説明もしえていない。また、保朝魯もただひとつの **i* をたてながら、*i* がオルドス方言の *i* 同様に **i* の折れを蒙らず **i* を反映するものと見なしており、その結果、*i* と *I* の対立を説明できないままである。

筆者は、諾爾金や保朝魯のように、*i* が祖語にあったとする考え方はとらず、清格爾泰と同じく、1) の *I* については、**i* の折れによって生じた音であると考え。そして *I* は、さらに、歴史的な前後関係についてはわからないが、ウムラウト化した母音 *æ* の一部や硬口蓋子音に続く *a* の一部とも合流することによって、次第にその機能負担量を大きくしていく方向に向かったのではないかと考えるのである。

3. **i* の折れによって生じた *i*

3.1 語頭 *i* の前の *j*

このように、1) の *I* が **i* の折れによるものであるとする根拠のひとつとして、上述の 1) に現れる *I* は、筆者の調査では音声的にはむしろ [i] であったことが指摘できる。[i] は、**i* が折れを起こした際、*i* まで移行せず [i] として保存されたものと考えられる。これまでチャハル方言についてこのような指摘がなされたことは知らないが、保朝魯 (1985) は、**i* の折れとの関

連性には気づいていないものの、絶対語頭にたつIが現代モンゴル語(=内蒙古語の口語標準語、筆者注)では、ときに[ji]と発音されることがあることを指摘している。さらに、同じく内蒙古語に属するホルチン(Khorchin)方言では、Iはなく、女性母音iに対して男性母音εが立てられているが、ここでも(Mo.) iraqu「開く」は jeryx, (Mo.) iljarqai「腐った」は jerdžirxa:のように、*iの折れが起こったと考えられる語の語頭にjが現われていることは(确精扎布 1982: 77)、チャハル方言の状況と考え合わせて注目すべき点である。

3.2 オルドス方言、ハルハ方言との対応関係

1) のIが*iの折れによってできたものであることを、さらに決定的にする事実が考えられる。すなわち、他の方言における*iの折れとの対応関係である。栗林(1982a)は、モンゴル諸語のうち、もっともよく*iを保存している内蒙古語オルドス(Urdus)方言と、もっとも広範囲に*iの折れが起きたと考えられる、モンゴル人民共和国の口語標準語の基礎となったハルハ(Khalkha)方言との比較により、両者は*iの折れの程度において両極端に位置しながらも、このような見かけの違いをこえて、発展の平行性が存在していることを明らかにした。具体的には、蒙古文語でaに先行するiが語頭にb, m, n, g, kをもつ場合、j, čをもつ場合、sをもつ場合、そしてøをもつ場合に、それぞれオルドス方言とハルハ方言に次のような関係が存在することを示している。以下、Urd.はオルドス方言、Kh.はハルハ方言を表わす。

(イ) b, m, n, g, kの場合

Mo. i=Urd. i=Kh. ja⁶⁾ (1)

Mo. i=Urd. a=Kh. a (2)

Mo. i=Urd. i=Kh. i (3)

(ロ) j, čの場合

Mo. i=Urd. i=Kh. Ča (4)

(Čは口蓋化子音 d₃, t_f)

Mo. i=Urd. a=Kh. Ca (5)

(イ) s の場合

Mo. i=Urd. i=Kh. a (6)

Mo. i=Urd. a=Kh. a (7)

(ニ) ø の場合

Mo. i=Urd. i=Kh. ja (8)

Mo. i=Urd. ja=Kh. ja (9)

ハルハ方言についてみると、(1), (8), (9) は j, (4) は先行子音の口蓋化によって、それぞれ *i の痕跡を残しており、「不完全な折れ」とよばれるものである。(2), (5) は完全に a に移行し *i の痕跡をとどめないため、「完全な折れ」とよばれる。一方、(3) は折れが起こらなかった例である。また (6), (7) はいずれも a があらわれていることから、「不完全な折れ」と「完全な折れ」の区別ができない。

ところで、栗林 (同上) は、上のようなハルハ方言とオルドス方言の対応関係が、少数の例外を除いて一定しており、入り乱れることがないという事実を明らかにし、オルドス方言に現れている段階を、蒙古文語とハルハ方言の中間段階と仮定することによって、ハルハ方言の「完全な折れ」と「不完全な折れ」は、時代的に異なる新・旧ふたつの変化であることを明らかにした。

この事実は、さらにチャハル方言にも敷衍することができる。すなわち、蒙古文語の a に先行する第 1 音節の i は、チャハル方言ではオルドス方言やハルハ方言とも、やはりわずかな例外を除けば、みごとな対応関係をなすのである。このことは翻って、i が *i の折れのある段階を反映した音であるということを裏づけてくれるように思われる。

以下、やはり蒙古文語で語頭子音 b, m, n, g, k をもつ場合, j, č をもつ場合, s をもつ場合, ø をもつ場合に分けて、チャハル方言の具体例をみていくことにする。例は比較の便宜のため、栗林 (1982 a) の例にできる限り従ったが、調査により確認しえなかった語はやむをえず省略した。オルドス方言形はモスタールト (Mostaert 1968), ハルハ方言形はロブサンデンデブ (Lubsandendeb 1957) による。

(i) b, m, n, g, k の場合

(1') Mo. i=Urd. i=Cha. ji=Kh. ja

蒙古文語の a に先行する bi, mi, ni, gi, ki は、チャハル方言では多くの場合、[bjɪ], [mjɪ], [njɪ], [gjɪ], [xjɪ] になる。

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
bila-	bila-	[bjɪl-]	бял-	「塗る」
bilqalja-	bilxaldži-	[bjɪlχäldʒ-]	бялхалз-	「溢れんとする」
bilta	bilta	[bjɪlt]	бялт	「雷管」
bira	bira	[bjɪr]	бяр	「体力」
milaya-	milā-	[mjɪla:-]	мялаа-	「新物を祝福する」
mindasun	mindasun	[mjɪndäs]	мяндас	「絹糸」
mingyan	ming<a	[mjɪŋcä]	мянга	「千」
miraya-	mirā-	[mjɪra:-]	мираа-	「忍び寄る」
mitara-	mi't'ara-	[mjɪtär-]	мятар-	「意気阻喪する」
niyta	niç't'a	[njɪɣt]	нягт	「緊密な」
nilqa	nilxa	[njɪlχ]	нялх	「赤ん坊」
nirai	nirā	[njɪræɕ]	нярай	「幼い」
nisal-	nisal-	[njɪsäl-]	нясал-	「指で弾く」
gilyar	gilag<ar	[gjɪlɣär]	гялгар	「きらきらした」
gilbalja-	gilbaldži-	[gjɪlβäldʒ-]	гялвалз-	「きらきら光る」
kilayana	k'ilag<ana	[xjɪlɣän]	хялгана	「はやがね草」
kilbar	k'ilbar	[xjɪlβär]	хялбар	「容易な」
kilyasun	k'ilg<asun	[xjɪlɣäs]	хялгас	「鬣の剛毛」
kimda	GimDa	[xjɪmd]	хямд	「安い」
kina-	k'ina-	[xjɪnä-]	хяна-	「監査する」
kirma	k'irmak<	[xjɪrmäɣ]	хярмаг	「新雪」
kirya-	k'irg<a-	[xjɪrɣä-]	хярга-	「刈る」
kirsa	Girsa	[gjɪrs]	гярс	「だったん狐」
kirjang	k'irdžan	[xjɪrdʒɪŋ]	хярзан	「会陰」

(2') Mo. i=Urd. a=Cha. a=Kh. a

オルドス方言、ハルハ方言のいずれでも完全な *i の折れを蒙っている語は、チャハル方言においても同様である。

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
miqan	maxa	[maχ]	мах	「肉」
niya-	nā-	[na:-]	наа-	「貼る」

(3') Mo. i=Urd. i=Cha. i=Kh. i

オルドス方言、ハルハ方言のいずれでも *i の折れが起きていない唯一の例である蒙古文語の bida は、チャハル方言においても同様に、*i の折れを起こしていない唯一の語である。

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
bida	biDa	[bid]	бид	「わたしたち」

このように、語頭に b, m, n, g, k をもつ場合、(1'), (2'), (3') のすべてにわたり、ひとつの例外もなく、この3方言はみごとな対応関係を示している。このことから、i が *i の折れによって生じたものであることは明らかである。

ところで、(1') の対応関係から、チャハル方言はオルドス方言よりも *i の折れが進んだ段階を反映していることがわかる。一方、ハルハ方言との前後関係については、この例で見る限り、ji ja と考えることも、チャハル方言でいったん ja となったものが、さらに j の影響で ji まで狭まった、すなわち ja ji と考えることも可能であり、即断できない。これについては、のちに述べることにする。

(四) j, č の場合

(4') Mo. i=Urd. i=Cha. i=Kh. Ča

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
ĵibar	džiwar	[dʒiβär]	жавар	「寒風」
ĵida	džiDa	[dʒid]	жад	「槍」
ĵiysaŋa-	džiGsā-	[dʒiɣsa:-]	жагсаа-	「並べる」
ĵilabči	džilab'čš'i	[dʒiläʈtʃ]	жалавч	「酒の蒸留鍋」
ĵiran	džira	[dʒir]	жар	「60」

jirya-	Džirg<a-	[dʒiryä-]	жарга-	「楽しむ」
čibayan	tš'iwag<a	[tʃiβäy]	чавга	「西洋すもも」
čida-	tš'ida-	[ʃid-] ⁷⁾	чад-	「できる」
činar	tš'inar	[tʃinär]	чанаp	「性質」
čindayan	tš'inDag<a	[tʃindäy]	чандага	「雪兔」
čingna-	tš'ingna-	[tʃiynä-]	чагна-	「聴く」
cf. čina-	tš'ina-	[tʃanä-]	чана-	「煮る」

(4) についても、唯一の例外をのぞけば、きれいな対応がえられた。その例外である [tʃanä-] に対する説明には2通り考えられるであろう。ひとつは、なんらかの音声条件により、他の語に先駆けて a まで *i の折れが進んだとする考え方である。もうひとつは、この語をハルハ方言からの借用とする考え方である。ただし、前者にかんしては、同じく i の後ろに n をもつ činar が上でみるとおり [tʃinär] であるため、採用しがたいようにも思われる。

この他にも、筆者の調査では I が、孫竹 (1985) では a がえられた語がいくつかみられたことにも注意しなければならない。例えば、蒙古文語の čibayan は、筆者の調査では、上例のごとく [tʃiβäy]、孫竹 (1985: 266-67) では、tʃabəg となっている。さらに、上例にはあげられていないが、čibayanča 「尼女」、čimalan・a 「不満に思う」は、筆者の調査ではそれぞれ [tʃiβyántʃ], [tʃimlän]、孫竹では tʃabgantʃ, tʃamln となっている。これがチャハル方言内部の地域差によるものなのかどうかはさらに調査してみなければならないが、I~a の揺れは、tʃi が折れに対する抵抗の弱いことを裏づけるものであるかもしれない。また、3語とも i に後続する子音が b, m であることは興味深い。

(5) Mo. i=Urd. a=Cha. a=Kh. Ca

蒙古文語の ji, či に、オルドス方言で Dža, tš'a が、ハルハ方言で dza, tʃa が対応している語では、オルドス方言同様、チャハル方言では dʒa, tʃa が現われる。ここで、ハルハ方言では語頭子音が口蓋化子音ではないことから、完全な折れが起こっていることがわかる。それに対し、チャハル方言ではオルドス方言同様、口蓋化子音であることから、*i の痕跡が認められるもので

ある。このことは、先ほど保留にしたチャハル方言とハルハ方言の前後関係について、後者が前者より *i の折れが進んだ段階を示していることを示唆していると考えられる。

Mo.	Urd.	Cha.	Kha.	
jiŋa-	džā-	[dʒa:-]	зaa-	「示す」
jiŋar	džār	[dʒa:r]	заарь	「麝香」
jiŋasun	džag<asu	[dʒayās]	загac	「魚」
cf. čirai	tš'aǎ	[tʃiɾe:]	царай	「顔」

ここでみられる例外 [tʃiɾe:] の第1音節の母音 i は、オルドス方言でも tš'arǎ と a が現れていることから、チャハル方言でもいったん a になったものが、さらに語頭子音 tʃ への同化作用で口蓋化して i まで狭まったと考えられる。特に、この語では、長母音をもつ第2音節に強さアクセントが落ちているため、第1音節の a は弱化し、tʃ に同化しやすかったことが考えられる。

この他、栗林がオルドス方言の tš'a にハルハ方言の ча が対応している例としてあげている次の2例は、チャハル方言でも tʃa である。

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
čingra	tš'ang<a	[tʃaŋgǎ]	чанга	「きつい」
čima-	tš'am (a)-	[tʃam-]	чам-	「人称代名詞2単斜格形」

この2例は、ハルハ方言に口蓋化した語頭子音が現われていることから、チャハル方言では tʃi が期待されるところである。一方、オルドス方言でも tš'i が期待されるところである。栗林はこのような tš'a の例外的な現われを、他の方言からの借用による可能性があるとして説明している。しかし、チャハル方言とオルドス方言が同じ語を借用したと考えるよりも、むしろ、この2語は、服部 (1983 c: 106) の指摘のように、前者は ŋg が後部軟口蓋音であるため、後者は m が後続の a の調音が前に移行することを妨げないために、それぞれ *i の折れが他の語に比べていち早く進んだものと考えられるべきであろう。

(6) s の場合

(6') Mo. i=Urd. i=Cha. i=Kh. a

以下の例では、オルドス方言の第1音節のiとハルハ方言のaにチャハル方言のIが対応している。

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
sibqar-	šiw ^u x ^a ara-	[ʃiϕχär-]	шавхар-	「搾り出す」
sidar	šidar	[ʃidär]	шадар	「親しい」
silʔa-	šilg<a-	[ʃilyä-]	шалга-	「試験する」
silta-	šilt'a-	[ʃilt-]	шалт-	「口実を作る」
sindasun	šinDasu _{<}	[ʃindäs]	шандас	「腱」
sita-	šit'a-	[jitä-]	шат-	「燃える」
sitar	šit'ar	[jitär]	шатар	「チェス」
cf. sinaya	šinag<a	[ʃanäyä]	шанага	「杓子」
sirba-	širwa-	[ʃarβä-]	шарва-	「尾を振る」

(7') Mo. i=Urd. a=Cha. a=Kh. a

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
siba-	šawa-	[ʃaβ-]	шав-	「塗る」
sibaʔ	šawak _{<}	[ʃaβäy]	шавар	「よもぎ類」
sibar	šawar	[ʃaβär]	шавар	「泥」
siya-	šā-	[ʃa:-]	шаа-	「打ち込む」
siya~siyai	šā	[ʃa:]	шагай	「くるぶしの骨」
siyarun	šāra~šāru	[ʃa:r]	шаар	「滓」
sira	šar	[ʃar]	шар	「黄色い」
sira-	šara-	[ʃar-]	шар-	「焼く」
sirʔa	šarg<a	[ʃaryä]	шарга	「馬が淡黄色の」
cf. siqa-	šaxa-	[ʃix-]	шах-	「圧搾する」
siqaʔa-	šaxā-	[ʃixa:-]	шагаа-	「のぞく」
siralʔin	šaralDži	[ʃiräldʒ]	шарилж	「黄よもぎ」
sirqa	šarxa	[ʃirχ]	шарх	「傷」

蒙古文語の *si* に対して、ハルハ方言では (6'), (7') とともに *ɬa* が現われており、**i* の折れの段階に区別が認められない。一方、オルドス方言は (6') では *i* が、(7') では *a* が、チャハル方言は (6') では *ɪ* が、(7') では *a* が現われていることから、両方言の対応からみる限り、(7') の方が (6') よりも **i* の折れが進んだものと考えることができる。

ところで、上にみるように、チャハル方言で語頭母音が *ʃ* の場合には、その他の子音に比べて例外が多い。ここで、**i* の折れに対しては、**ni* よりも **tʃi* が、**tʃi*, **dʒi* よりも **ʃi* がいっそう抵抗力が弱いという服部の指摘 (1983 a: 112-13) は重要である。まず、(6') の例外である [*ʃanäyǎ*], [*ʃarβǎ*] は、他の語に先駆けて *a* になった可能性が考えられる。一方、(7') はオルドス方言では *a* が現われていることから、チャハル方言でも、当然 *a* が予想されるところである。したがって、(7') の例外では、いったん *a* となったものが、さらに語頭の硬口蓋子音に同化して、*ɪ* に移行したと推測することができる。

(二) *ø* の場合

(8) Mo. *i*=Urd. *i*=Cha. *jɪ*=Kh. *ja*

語頭子音が *ø* の場合には、チャハル方言はひとつの例外もなくオルドス方言、ハルハ方言と対応している。

Mo.	Urd.	Cha.	Kh.	
idqa-	iɬxa-	[jitäy-]	ятга-	「扇動する」
ilaɣa	ilō	[jɪla:]	ялаа	「蠅」
ilangɣui	ilang^ɰi	[jɪlǎŋguě]	ялангуяа	「特に」
ilya-	ilg<a-	[jɪlyǎ-]	ялга-	「区別する」
imaɣta	imaɣ^ɰt'a	[jɪmäχt]	ямагт	「常に」
inaɣ	inak^ɰ	[jɪnäy]	янаг	「恋愛の」
inčaya-	intš'ag^ɰǎ-	[jɪntʃiya:-]	янцигаа-	「嘶く」
injaɣ·a	indžag<a	[jɪndžǎy]	янзга	「羚羊の仔」
ira-	ira-	[jɪr-]	яр-	「開ける」
irɣačɪn	irg<a'tš'in	[jɪrǎχtʃɪn]	яргачин	「殺人者」
irɣai	irgǎ	[jɪrɣǎě]	яргай	「さんざし」

irja yi- iržǔ- [jirdʒɪ:-] ярзай- 「齒をむき出す」

(9') Mo. i = Urd. ja = Cha. ja ~ ji = Kh. ja

Mo. Urd. Cha. Kh.

imaʁan jamā [jama: ~ jima:] ямаа 「山羊」

(9') は、オルドス、ハルハ方言のいずれでも、語頭に ja が現われる唯一の例である。チャハル方言については筆者の調査では、[jama:] の他にも [jima:] があることが観察された。武達 (1982) の調査でも同じ結果がえられていることから、現在、両形が存在するものと考えられる。また、オルドス方言、ハルハ方言では、折れの程度がそれぞれ異なるのにもかかわらず、jama: が現われている。これが服部の指摘するように、その祖形が *imaʁan ではなく *imaʁa:n であり、いち早く ima: (n) となり (1983 a: 112), さらに、l や r などの子音に比べて、m が後続の a の調音が前に移行することを妨げなかったために (1983 c: 105), オルドス方言でも jamā になったものであるならば、チャハル方言でも、当然 [jama:] が予想されるところである。すると、もうひとつの形 [jima:] は、やはり、いったん a まで折れたものが、さらに硬口蓋子音の影響で、I へと逆行したものと考えることができる。

3. ま と め

以上、本稿では、チャハル方言で女性母音 i に対立する音素として認められている男性母音 I について、その由来を考察し、これが祖語の段階にすでに女性母音 i に対立していたものではなく、新たに生じたもので、その発生にはひとつには *i の折れが関与していることを見てきた。これにより、I の正しい位置づけがなされたと考えられる。

さらに、服部は *i の折れについて、それぞれの方言によって、その起こった範囲が異なると指摘しており (1943: 277), 栗林 (1981 b: 35) はそれを受けて、各方言における *i の折れの実際を、できるだけ網羅的に調査することの必要性を強調している⁸⁾。本稿では、ハルハ方言やオルドス方言以外にも、各方言によって、*i の折れが多様な現われを見せていることを、具体的に、チャハル方言の実例によって明示するとともに、この方言の *i の折れが、ハ

ルハ、オールドス兩方言の中間段階を示すことも指摘した。

ところで、Iはチャハル方言の母音調和における母音の分類基準を考えていく上でも、重要な意味をもっている。清格爾泰 (1979: 7) によれば、Iは調音的に、「i (中国語の「衣」)に比べると、舌根が後ろに引かれ、喉頭部が緊張し (下線は一ノ瀬)、調音点が後ろになり、唇も両側に引かれる」とある。ちなみに筆者の観察では、[i]を発音する際には、顎の下、喉仏の上あたりの筋肉が下がるのに対して、[ɪ]を発音する際にはそれがないこと⁹⁾、唇が両側に引かれ、それと同時に顎も引かれることが認められた。

清格爾泰は、このように舌根の動きに着眼し、これをさらに敷衍することによって、チャハル方言の母音調和が従来考えられていたような、狭／広 (服部 1975)、あるいは diagonal harmony (城生 1976) といったものではなく、舌根によるものであり、舌の上下の動きや開口度はそれに付随して起こる二次的な現象であるとしている (1982: 89)。この指摘は以前にも同じく清格爾泰 (1959) によってなされており、従来最初であると考えられていた西アフリカのアカン語における舌根の母音調和の指摘 (Stewart 1967) に数年先駆けるものとして、評価されるべきものである¹⁰⁾。

ここで仮りに、清格爾泰らによって立てられているチャハル方言の8母音を基本母音図 (図1参照) によって、それがあくまでも客観的な測定のもと

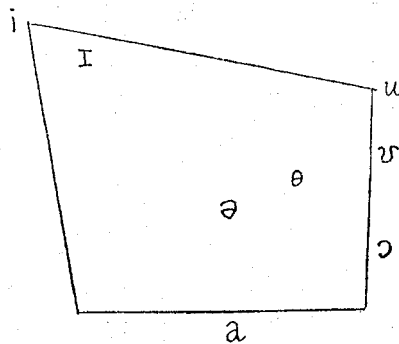


図1 チャハル方言の基本母音図
(清格爾泰・新特克 1959 に基づいて作図)

づいて作られたものと仮定してみると、それぞれ対立する母音間の距離は一樣ではなく、特に、Iとiとの距離は非常に小さい。Iは上で論じてきたように、新たにチャハル方言の母音体系に加えられた音であり、したがって、当然、既存の母音類の分類基準に従って働くはずである。とすると、iとIを広／狭の対立とするのが妥当か否か、この点からも客観的なデータを整備し上で、再検討の余地があるかもしれない¹⁴⁾。

しかしながら、舌根の前後の動きは上下の動きと連動しており、決して別々のものではない。チャハル方言の母音調和を、広／狭の対立とすることも、舌根位置の対立とすることも、同じひとつの現象を別の角度からとらえたにすぎないとも言えるかもしれない。したがって、その決定に関しては、さらに多くの客観的データにもとづく検証と慎重さが必要とされることはいうまでもない。この点については、稿を改め論じてみたい。

以上、これらの問題を解明していくためにも、まずはチャハル方言のI音の歴史的な位置づけをおこなった次第である。

〔注〕

- 1) ここで第1音節の短母音に限って音素を設定しているのは、チャハル方言では他のモンゴル語諸方言同様、短母音は強勢のある第1音節に現れるもののみが明瞭に聞こえ、第2音節以降は弱体化して曖昧になるためである。
- 2) わが国では栗林(1989)が、チャハル方言の前舌母音に、張り母音音素 i[ɿ] と弛み母音音素 i[i] の対立があることを指摘している。ただし、ここでいう「張り」と「弛み」が、従来の「声道の中性位からの逸脱の程度」(例えば Jakobson and Halle 1964: 96) の対立として用いられているのならば、逆に張り母音が [i] で弛み母音が [ɿ] となるべきところである。この点、栗林氏に確認したところ、氏はこの語をモンゴル語の母音調和において対立する母音の2系列を表わす tʃaŋga「引き締まった」/ xɔndii「空洞の」という語の訳として用いられたということである。しかし、混同を避けるためには、別の用語を考えるか、あるいはそれについてなんらかの説明を加える方がよいであろう。
- 3) 本調査のインフォーマント特古斯氏^{トクス}は1965年、内蒙古シリントグ盟西スニド旗生まれ。4才からは同盟フブート・シャル旗に移住し、15才で同盟シリントグ市の中学に進学するまでは当地に居住した。両親ともフブート・シャル旗出身のチャハル方言話者で、本人もチャハル方言で育ったチャハル方言話者である。
- 4) 武達^{フダ}はフブート・シャル旗の東部に隣接するショローン・チャガーン旗、およびショローン・チャガーン旗のさらに東部に隣接するショローン・フフ旗のチャハル方言の、一方、孫竹はショローン・フフ旗のチャハル方言の資料に基づいている。これら

- 3 旗のチャハル方言は相互にほとんど音韻的差異がないと思われるが、さらに詳しい調査により、同一方言内の地域的な差異が認められる可能性も否定できない。
- 5) 1語を表わすモンゴル文字が、語末の母音の前で切れていることがある。ローマ字転写では普通、ハイフンでその切れ目を示すが、形態素境界を示すハイフンとの混同を避けるために、ここでは・で示す。
- 6) 栗林はこの音を *ia* としているが、ここでは同じ音価を表わすと考えられる *ja* に便宜的に置き換える。
- 7) 蒙古文語の *ǰ* はチャハル方言の *tʃ* に対応するが、孫竹は例外として少数の語では、*ʃ* となることを指摘している (1985: 80)。
- 8) 栗林 (1982a) は、*i*ja という不完全な折れによって実現される母音は多様であり、ヴァリエントとして平舌の中舌母音 *i*、前寄りの広母音 *a* があらわれることが観察されるところとしている。ここでいう *i* は、栗林が内蒙古語 (1989: 1428) でもチャハル方言に男性母音 *i* と女性母音 *i* の対立があるとしていることから、あるいは、チャハル方言のそれかとも考えられるが、ここでは前舌母音としているので、両者をにわかに同定することはできない。
- 9) ちなみにハケットは英語の *bit* [bit] や *ip* [dɪp] を発音する際には、喉仏の上 (舌骨の下) あたりの筋肉に、特別な緊張が指でさわっても感じられないのに対し、*beat* [bit], *deep* [di:p] の場合には、はっきりした束集 (*bunching*) があることを指摘している (Hockett 1957: 78)。筆者の観察はこれと対応するようにも思われる。
- 10) 中国では舌根の動きがいち早く注目されていた理由として、ひとつにはモンゴル語の母音調和における母音類を分類する際、伝統的に用いられてきた *tʃanga əgfig* 「引き締まった母音」、*xəndii əgfig* 「空洞の母音」という用語の解釈をめぐる議論が基盤になっていたことが考えられる。例えば、前舌母音についていうと、*tʃanga əgfig* は [i] を、*xəndii əgfig* は [ɪ] を表わすが、これは音声学でいう「張り *tense*」, 「弛み *lax*」で示す音とは逆である。したがって *tʃanga* と *xəndii* は、当然、なにか別の発声器官の緊張について言ったものではないかという疑問が生じるはずである。
- また、このような舌根の位置の対立による母音調和は、最近では、モンゴル語との系統関係がつとに論じられてきたツングース諸語の祖語 (Ard 1980) や中世韓国語 (金 1988) でも指摘されてきている。
- 11) ちなみに金 (同上) は、舌根の母音調和をする言語では、二つの *i* をもつことはそれほど珍しいことではないと指摘している。なお、舌根の母音調和については、城生恒太郎先生から有益なご教示をいただいたが、本稿では校正の都合上、大幅な改正ができないので、今後の考察に役立てたい。

参 考 文 献

- Ard, J. (1980): "A Sketch of Vowel Harmony in the Tungus Languages", in B. Comrie (ed.), *Studies in the Languages of the USSR* (Carbondale & Edmon-ton: Linguistic Research Inc.), 23-43.
- 服部四郎 (1943): 『蒙古とその言語』(湯川弘文社, 東京/大阪).
- 服部四郎 (1951): 「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』, 19・20, 68-102.

- 服部四郎 (1975): 「母音調和と中期朝鮮語の母音体系」『言語の科学』, 6, 1-22.
- 服部四郎 (1978): 「アルタイ諸語・朝鮮語・日本語の母音調和」『言語』, 7(4), 80-88.
- 服部四郎 (1979): 『新版 音韻論と正書法—新日本式つづり方の提唱—』(大修館書店).
- 服部四郎 (1983 a): 「蒙古諸言語の『*iの折れ』」『言語』, 12(6), 109-113.
- 服部四郎 (1983 b): 「蒙古諸言語の『*iの折れ』再説(上)—paper phonetics 的思考を防ぐために」『言語』, 12(11), 100-105.
- 服部四郎 (1983 c): 「蒙古諸言語の『*iの折れ』再説(下)—paper phonetics 的思考を防ぐために」『言語』, 12(12), 104-108.
- 服部四郎 (1984): 『音声学』(岩波書店).
- Hockett, Charles F. (1958): A Course in Modern Linguistics (The Macmillan Company, New York).
- Jakobson, Roman and Morris Hale (1964): "Tenseness and Laxness"; in David Abercrombie et al (eds.), In Honour of Daniel Jones, Papers Contributed on the Occasion of his Eightieth Birthday 12 September 1961 (Longmans, London), 96-101.
- 城生佰太郎 (1976): 「モンゴル語の母音調和」『言語』, 5(6), 53-61.
- 金 周源 (1988): 「母音調和と舌縮—中世韓国語の文献『訓民正音』に見られる『舌縮』の解釈—」『通信』, 62 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), 5-7.
- 栗林 均 (1981 a): 「『*iの折れ』考—蒙古語における *i 音の発展の規則性と不規則性」『モンゴル研究』, 12 (日本モンゴル学会), 32-49.
- 栗林 均 (1981 b): 「蒙古語諸方言における語頭 *i 音の発展」『一橋研究』, 6(3) (一橋大学), 1-16.
- 栗林 均 (1982 a): 「『*iの折れ』再説—ハルハ方言とオルドス方言の発展の平行性—」『モンゴル研究』, 13 (日本モンゴル学会), 37-55.
- 栗林 均 (1982 b): 「蒙古語史における『*iの折れ』の問題点」『言語研究』, 82, 29-47.
- 栗林 均 (1985): 「蒙古語諸方言におけるウムラウト現象」『音声の研究』, 21, 89-99.
- 栗林 均 (1989): 「内蒙古語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第2巻 世界言語編上』(三省堂), 1426-1434.
- Lubsandendeb, A. (1957): Mongol'sko-russkij slovar' (Moskva).
- Mostaert, A. (1968): Dictionnaire Ordos, seconde éd. (rpt.) (New York/London).
- Stewart, J. M. (1967): "Tongue Root Position in Akan Vowel Harmony", *Phonetica* 16(4), 185-204.
- Vladimircov, B. J. (1929): Sravnitel'naja grammatika mongol'skogo pis'mennogo jazyka i xalxaskogo narečija, Vvedenie i fonetika (Leningrad).
- 白音朝克图 (1981): 「論蒙古語元音」『内蒙古大学学报 哲学社会科学 蒙文版』, 2 (内蒙古大学), 129-140.
- 保朝魯 (1985): 「東部裕固語中詞首音節元音 *i 的演变」『内蒙古大学学报 哲学社会科学 蒙文版』, 4 (内蒙古大学).
- 諾爾金 (1981): 「察哈爾土語音位系統的特点」『内蒙古師範學院學報』, 1 (蒙文) (内蒙古師範學院), 20-38.

- 清格爾泰 (1957-58): 「中國蒙古語族語言方言概況」『蒙古語文』, 11, 12 (1957); 『蒙古歷史語文』, 1-4, 6-7, 12 (1958) (蒙文) (內蒙古大學蒙古語文研究所編『語文學術論文集』, 2, 所收, 241-476, 1986).
- 清格爾泰 (1963): 「蒙古語音系統」『內蒙古大學學報』, 2 (蒙文) (內蒙古大學), 1-84.
- 清格爾泰 (1979): 『現代蒙語語法』(蒙文) (內蒙古人民出版社).
- 清格爾泰 (1982): 「關於元音和諧律」『內蒙古大學學報 哲學社會科學 蒙文版』, 1 (內蒙古大學), 87-110.
- 清格爾泰·新特克 (1959): 「關於蒙語基本元音」『內蒙古大學學報』, 2, (蒙文) (1986, 內蒙古大學蒙古語文研究所編『語文學術論文集』, 1, 所收, 21-38).
- 碩精扎布 (1982): 「科爾沁土語元音音位的某些特點」『內蒙古大學學報 哲學社會科學 蒙文版』, 1 (內蒙古大學), 71-86.
- 孫竹 (1985): 『蒙古語文集』(青海人民出版社).
- 武達 (1982): 「察哈爾土語音位系統的一些特點」『內蒙古大學學報 哲學社會科學 蒙文版』, 4 (內蒙古大學), 184-209.